



# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビューの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（恒文社）  
「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」（人間の科学新社・共著）  
「明治大学政経論叢 2016年度（新潟美人）」  
（明治大学政治経済研究所）等

## 「風まつり」

今年のなまらあつちえ夏、海の向こうからヒアリがやってきて背筋も凍りました。

外来種のカミキリムシも増えて農家はおおわらわでした。同じ外来種である Dengue 熱の媒介蚊も気になります。害虫、水害、地震、地滑り等々、どんなに科学技術が進歩しても、泣く子とお天道様、自然物には勝てませぬ。昨今の自然界では、いつ・どこで・なにが発生しても不思議でないおおごと状態です。とくに、実りの季節は風害が気になります。

黄金色に大地が染まる新潟の秋、お天道様と神様への祈りの儀式は、科学の進歩していなかった当時の人々にとって「風まつり」という形で執り行われました。

「二百十日も無事に過ぎ・・・」ということばがあるように、立春から数えて二百十日目の九月一日は、台風の襲来する時期。同時に稲の実りの時期です。ですから、風の神さまへの祈りと風鎮めの儀式「風まつり」を執り行いました。

風の神さまを「風の三郎様」と呼ぶ地域が県内各地にあり、新発田近辺の阿賀北地域では「風の三郎さん 風吹いてくりやんな くりやんな」と子供たちが唱和して地域を練り歩いた風習もみられました。

宮沢賢治の作品に『風の又三郎』がありますが、三郎さんの仲間かね？と気になり調べてみると、なんと！「風の三郎様」と称して祭礼を行う地域には賢治ゆかりの岩手県と新潟県にみられました。あの宮沢賢治も風まつりを見聞きし、あるいは体験したのかもしれませんが。さらに調べると、長野県に「風三郎様」（なぜか獅子、とくに越後獅子を嫌うとか！）を祀った神社もあり、詳細は不明ですが、地

理的・信仰的に本県との関りが見てとれて「風まつり」と関係がありそうです。というのも、全国的にみると「風まつり」が、かつて行われていた地は、本州中心部に集中しているのです。

県内でも、先の新発田をはじめ、旧五泉、旧下田、頸城、魚沼の山間部に「風まつり」の風習がみられます。祈りの形式は、夕顔の実を竹に刺したものを村の入り口や田の水口に立て、風よけをする地、風の神に献灯する地、神官を招き祭礼を執り行う地と、地域により形はさまざまですが、収穫と風除けを祈りつつ、地域の結束を確かめ合いながら防災を意識する重要な節目となっています。

粟島では、この日一日作物に触るな、山に入るなという掟があり、静かに祈ることが「風まつり」であったと思われます。隣県富山で九月一日から夜通し行われる越中風の盆、有名なおわら風の盆まつりも、実は「風まつり」の意味があるともいわれています。

現在、県内ではこの日を秋の祭礼として神事を執り行う神社がありますが、古来の風まつりの色合いもあったのかもしれませんが。備えあれば憂いなし、この秋、風雨なく、災いなく、豊作万作でありますようにと、人々の思いは昔も今も変わりません。

※なお「風まつり」に関しては諸説あり、本稿はあくまでも筆者の調査・取材によるものです。

